SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

養護教諭の専門性を活かした保健と社会科の横断的学習の試み

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-05-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 渡邊, 睦美, 鎌塚, 優子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00010164

〈実践報告〉

養護教諭の専門性を活かした保健と社会科の横断的学習の試み

渡邊睦美*　鎌塚優子**

Cross-Curricula Study Venture between Health and Social Studies, Leveraging the Specialization of the *Yogo* Teacher

Mutsumi Watanabe*, Yuko Kamazuka**

要旨

健康教育の内容は，体・心・命を扱う「生きる」ことにつながるものであるという視点から，保健教育の学習内容はさまざまな教科と関連している内容があるため，「横断的学習」を行うことの意義は深く，それぞれの教科の学びを深化させる可能性が考えられる。

次期学習指導要領の改訂が目指す，これからの時代に求められる「知識・技能」，「思考力・判断力・表現力」，「学びに向かう力，人間力」といった資質・能力を育むためには，各教科等の学習とともに，「教科横断的」な視点で学習を成り立たせていくことでより効果的となっていくことからも，保健と他教科との横断的学習に取り組む意義があると考える。

そこで6年生の保健「病気の予防」の地域で行われている保健活動と，社会科「暮らしの中の政治」との横断的学習による授業実践を試みた。実践を通して，社会で活用できる知識の習得をより図りやすくなることや，養護教諭の専門性を幅広く認識でき，且つそれらが子どもの学びを支えるものとなることが示唆された。一方で，教材の共通性ばかりに目が向いてしまうと，教科としての目標が曖昧になってしまう可能性があることも示唆された。次期学習指導要領において謳われる，生きて働く「知識・技能」の習得，未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成，「学びに向かう力・人間性等」の涵養という点を踏まえ，「ねらいの共通性」という視点で今後の横断的学習の展開を考えていく必要がある。

キーワード：養護教諭　専門性　横断的学習

1　はじめに

私たちが社会の中で活力ある生活を送るためには，健康であることが何よりも大事であり，基本である。日々の生活をよりよく営んでいくための原動力の一つが健康である。それは子どもにとっても同様であり，学校や地域社会の中で勉強や運動，遊びに意欲的に取り組み，幸せな生活を送るためには，健康であることはとても大切なことである[1]。しかし，情報化，少子高齢化など子どもを取り巻く社会状況等のめまぐるしい変化に伴い，子どもたちの生活習慣の乱れ，いじめ，児童虐待等のメンタルヘルスの課題，アレルギー疾患など，様々な健康課題が顕在化している[2]。このような子どもの健康課題に対し，学校，家庭，地域社会が連携して，社会全体で子どもの健康づくりに取り組むことが必要とされ[3]，関係機関が様々な方策を打ち出している。日本学術会議健康・生活科学委員会子どもの健康分科会においては，子どもの健康課題及び提案を推進するための方策を示している[4]。

我が国においては健康増進に係る取り組みとして，「国民健康づくり対策」が昭和53年から数次にわたって展開されてきている[5]。この背景には次のようなことが挙げられる。戦後，国民の健康水準は，乳児死亡率等の改善や栄養摂取量の増加等により著しく向上した。一方で，都市化や高齢化が進み，健康に影響を与える要因は複雑化・多様化していった。また，運動不足や栄養の偏りが高血圧や肥満を招き，脳卒中・がん・心臓病が増加する問題が生じてきた。このように健康を取り巻く情勢が大きく変化する中，健康をめぐる施策が治療から予防に目が向けられるようになっていった。こうした中，より積極的な健康増進対策を推進し，国民の健康水準を引き上げる方向へ転換を図ることが必要と考えられるようになってきた[6]。現在取り組まれているのは，第4次にあたる「健康日本21（第2次）」である。健康を実現するためには，一人ひとりが主体的にその課題に取り組む必要があるが，その一方で，個人を取り巻く社会には，行政，マスメディア，企業，

＊静岡大学教育学部附属静岡小学校
＊＊静岡大学

学校，家庭など様々あり，それらが制度，情報，サービスなどを提供することによって，個人の健康の実現に役立てることができる[7]。子どもの健康づくりの視点から見ても同様である。健康問題が複雑化，多様化し，更に少子高齢化や疾病構造の変化による現代的な健康課題も生まれてくる中，それらの解決を図るためには健康に関する課題を個人的な課題とするのではなく，学校，家庭，地域社会が連携して，社会全体で子どもの健康づくりに取り組んでいくことが必要とされている[8]。しかし，地域社会の弱体化が進んでいる現状において，子どもの健康づくりを考えた場合，学校を核として，そこから地域社会へと拡がっていく方策を考える必要がある[9]。このようなことから，学校教育，学校保健の果たす役割は更に重要になっていくと考え，授業実践を行った。

2　保健と他教科との横断的学習

健康教育の内容は，体・心・命を扱う「生きる」ことにつながるものであるという視点から，生きることを対象とする保健教育の学習内容はいろいろな教科と関連している内容があると思われ，「横断的学習」が展開できると考えた。そこで昨年度(平成27年度)は，保健と理科の横断的学習の授業実践を行った。この実践により，保健と他教科との横断的学習を展開していくことによって，どちらの教科の学びも深めていくことができる可能性があるという成果がみられた[10]。

小学校において，子どもたちが健康に関する学びをする教科は体育科保健領域(以下「保健」)である。また，社会科において，地方公共団体や国の政治の働きについて学ぶ。具体的に保健では，6年生の学習内容「病気の予防」で地域で行われている保健活動について学ぶ[11]。この内容は，小学校では現行の学習指導要領から新たに加わったものである。その背景には，現行学習指導要領改訂の要点にある「健康な生活を送る資質や能力の基礎を培う観点から，系統性のある指導ができるよう健康に関する内容を明確にすること」という方針から，小中高の系統性から教えるという観点がある。

中学校では「健康な生活と疾病の予防」，高等学校では「現代社会と健康」において，地域保健の学習が既に行われていた。ヘルスプロモーションの理念に基づき，健康の概念を伝える上で小学校から系統的に教えていくべきこととして入ってきた内容である[12]。新たに加わった内容であったが，小学校ではここに着目した教育実践が深められてこなかった。「精神・身体ともに健康である」という健康への価値観のもとに健康づくりの様々な施策が行われてるが，健康課題は複雑化・多様化している。社会全体で健康づくりに取り組んでいく必要性が叫ばれている中，地域保健に焦点をあてていくことは重要だと考える。

また，社会科においては6年生の学習内容「暮らしの中の政治」で，国民生活には地方公共団体や国の政治の働きが反映していることについて学ぶ。具体的には，市や県，国による高齢者や障害者のための福祉政策，健康医療に関する事業，子育て支援事業などが国民生活の安定と向上を図ろうとする地方公共団体や国の政治の働きによるものであることを学習していく[13]。

このように見ていくと，この2つの教科の学習内容に共通性が見えてくる。上記の内容を扱うことで「保健」と「社会科」においても，横断的学習の効果が得られるのではないかと考えた。

また，次期学習指導要領の改訂が目指す，「社会に開かれた教育課程」の実現を通じて子どもたちに必要な資質・能力を育成するという理念を実現するためには，教育課程全体を通した取り組みを通じて，「教科横断的」な視点から教育活動の改善を行っていくことが求められている[14]。これからの時代に求められる「知識・技能」，「思考力・判断力・表現力」，「学びに向かう力，人間力」といった資質・能力を育むためには，各教科等の学習とともに，「教科横断的」な視点で授業を構想することが効果的となっていくことからも，保健と他教科との横断的学習に取り組む意義があると考える。

更に，昨年度の実践から，担任と養護教諭とTTで授業を実践することで，互いの専門性を発揮でき，子どもにとっても授業内容がより理解しやすいものとなるという成果も見られた[10]。保健と他教科との横断的学習の実践を通して，授業に養護教諭が係る意義を明確にすることで，授業実践において養護教諭の専門性がどのように活かされるのかを更に丁寧に捉えていきたい。

3　授業実践

(1)　6年「病気の予防」の授業計画

本単元は，病気の起こり方や予防について知ることを通して，日頃の生活についてふりかえり，健康な生活を送るためのより良い方法を自分なりに考えることをねらいとしている。そこで，まず，子どもにとって身近な病気である「かぜ」を取り上げることとした。そうすることで，病気の原因は病原体だけではなく，生活のしかたもかかわっていることに気づくことができると考えた。また，生活のしかたにかかわる病気として，生活習慣病や病気の原因になりやすい飲酒・喫煙を取り上げていく。そうすることで自分の生活に目を向け，今後より良い生活に向けて自分の生活を考えることにつながっていくとも考えた。

学習を進めていく上では，自分の周りにはより良く生活をしていくことを支援してくれる施設や制度があることにも気づかせたい。そこでは，周りから得た情報や，施設・制度を活用していく方法を知り，生涯を通した健康の保持増進について考えさせたい。そして，この単元の学習が，自分の生活を見つめ直し，自分自

身の成長を感じたり，より良い生活に向かって考えたりするきっかけになることを期待して，表１のような授業計画とした。

表１　授業計画

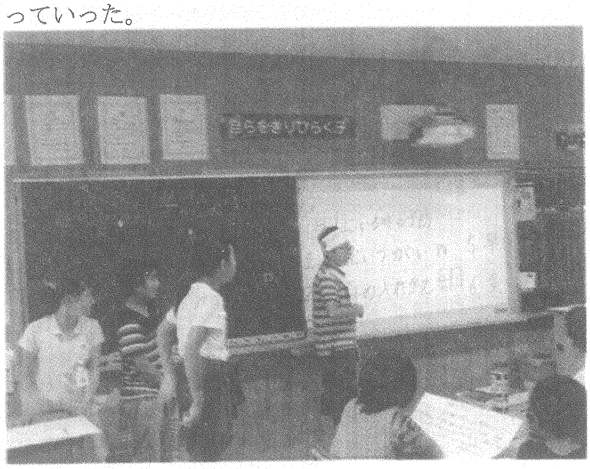
教科	題材名	授業内容	養護教諭の関わり
保健	◆病気の起こり方 ◆病原体がもとになって起こる病気の予防	＜健康な生活ってどういうことだろう。＞ ・かぜをひかないってことかな。　・病気にならないこと。 ＜かぜをひいたとき、どんなことに困っただろう。＞ ・学校を休まなきゃいけないよ。　・すごく暑い日なのにプールに入れないよ。 ＜みんなで元気に修学旅行へ行くために予防方法を考えよう。＞ ・マスクをすると自分も周りも予防になるよ。　・栄養のあるものを食べるといいね。 ＜クラスのみんなに伝えよう。＞ ・ポスターを作ろう。　・かぜ予防ブックを作って教室に置いたら読んでくれるかな。	【保健室で捉えた実態を活用】 ・病気で修学旅行に参加できなかったり、行事が中止になってしまったりしたエピソードを語ることで、この学習に対しての意欲や必要感が生まれる。 【専門的視点による価値づけ】 ・子どもたちが出し合ったかぜの予防方法を価値づけたり、補足をしたりすることで、子どもの考えが広がったり深まったりする。
	◆生活のしかたがかかわって起こる病気の予防(1) ◆生活のしかたがかかわって起こる病気の予防(2)	＜かぜの他にどんな病気があるだろう。＞ ・インフルエンザ　・水痘瘡　・がん　・脳梗塞 ＜3つの病気について調べよう。＞ ・がん　・血管の病気　・むし歯、歯周病 ＜身近な人に生活習慣病について伝えよう。＞ ・リーフレットを作ろうかな。・調べたことを伝えたいな。手紙を書いてみようかな。 ＜自分の生活を振り返ってみよう。＞ ・寝るのが遅いから朝起きられないんだよね。 ・最近運動不足だな。休み時間に外で遊ぶようにしよう。	【学びを深めるための学習環境整備のコーディネーター役】 ・生活習慣病についての学びを深めていけるように保健福祉センターでの学習態勢を整える。 ・子どもたちが出した病気を「病原体がもとになって起こる病気」と「生活のしかたがかかわって起こる病気」に分類する。 ・保健福祉センターで学んだ内容を確認し、補足説明等をする。
	◆たばこの害と健康 ◆飲酒の害と健康 ◆薬物乱用の害と健康	＜こんな時どうする。＞ ・先輩にたばこをすすめられる。　・親戚のおじさんにお酒をすすめられる。 ＜ペアで誘ったり断ったりしよう。＞ ・きっぱり言わないとダメ。　・「いや」とはっきり断る。 ＜もっと上手に断るためにはどうしたらいいだろう。＞ ・「いや」って一言じゃなくて、どうしていけないかを伝えた方がいいんじゃない。 ・相手は先輩だから、ていねいに伝える方がいいよ。	【専門性を活かしT1として学習を進める】 ・担任が先輩役として子どもを誘う役をやるため、養護教諭がT1、担任がT2として行う。 ・自分の知識や思いを押し付けるのではなく、相手のことを理解したり認めたりしながら学習をすすめられるようにする。
	◆地域で行われている保健活動	＜私たちの身の周りでは健康な生活を送るためにどのようなことが行われているのだろう。＞ ・保健室は、けがの手当てだけでなく健康についても話してくれるね。 ・夏休みに集めたリーフレットを見れば、もっといろいろなことがわかるかも。 ＜どんなリーフレットを集めてきたかな。集めてみてどんなことに気づいたかな。＞ ・スーパーの入口とか、身近なところに置いてあったよ。 ＜私たちの地域では、どんな保健活動が行われているのだろう。＞ ・「食育教室」とか「運動教室」とか、「○○教室」って書いてある仲間で分けられたよ。 ・私たちが健康に暮らせるために、地域でもいろいろな保健活動をしているんだね。 ・どうやって利用したらいいか、よくわからないな。 ＜地域の保健活動を、私たちはどのように利用したらいいのだろう。＞ ・自分はわかるけど、家族がどう利用するかはよくわからないな。 ＜ちびまる子ちゃんの家族は、地域の保健活動をどのように利用したらいいだろう。(ケーススタディ)＞ ①祖父母の食中毒　②父の生活習慣病　③母のストレス ＜身近な人に保健活動をすすめよう。＞ ・ぼくのお父さんにも運動教室のことを話したいな。	【専門的知識を活かした資料の準備】 ・リーフレットがたくさんあることが視覚的にわかるように、コピーをすべて模造紙に貼って提示する。 【専門的視点による価値づけ】 ・リーフレットの仲間分け活動の際には、分類の仕方を価値づけたり、分類の仕方で悩んでいる時には助言したりする。 【専門的知識の活用】 ・保健センターや保健所など、出てきた施設が何をしているところなのかを説明する。 ・ケーススタディの3つの内容を説明する。 ・保健所とつなげて考えていけるように、ケース①を中心に、グループごと必要に応じて補足説明をしていく。
社会	◆もっと清水を住みよい町に	＜ちびまる子ちゃんの家族は、どんな施設を利用すればよかったかな。＞ ・冷やしきゅうりのケースは、保健所や病院だよ。 ・お父さんやお母さんは、主に保健センターじゃないかな。 ＜これらの施設は、実際の清水区のどこにあるだろう。＞ ・地図上だと近くに見えるけど、本当は遠いのかな。 ・私は清水に住んでいるけど、歩いては行けないな。 ＜清水区をよりよい町にしていくために、どうすればいいだろう。＞ ・もっと保健施設を利用しやすいようにすればいいんじゃないかな。 ＜みんなの願いを実現するためにはどうしたらいいんだろう。＞ ・市の代表者が話し合うんじゃないの。市議会とか。	【保健学習の内容のつなぎ役】 ・保健の授業で実施したケーススタディを振り返る。 ・清水区の保健施設の場所を地図上で確認していく。

(2)　第①②時「病気の起こり方」「病原体がもとになって起こる病気の予防」

まず初めに，子どもたちに「健康な生活ってどういうことだろう」と投げかけた。「早寝早起き」，「3 食食べる」，「運動する」等を挙げる子が多い中，ある男児が「病気にならない」と発言したことをきっかけに，病気

になると健康ではないと感じ始めたところから，病気になると困ることを出し合っていった。授業を行った頃は修学旅行を控えていた時期だったため，養護教諭から保健室で捉えた実態を活用して，病気で修学旅行に参加できなくなってしまったり，行事が中止になってしまったりした事例をいくつか話した。子どもたちからは「いやだ」，「かわいそう」，「行きたい」等のつぶやきが聞かれ，修学旅行やその他の行事にも元気に参加するために，病気を予防する必要感を持たせることにつながった。

修学旅行の３日間を健康に過ごし楽しい思い出を作りたいという思いをもった子どもたちは，みんなで修学旅行へ行けるように，子どもたちにとって一番身近な病気であるかぜの予防方法について考えて，それをクラスのみんなに伝えるための話し合いに進んでいった。予防方法をグループごと出し合う中で，今まで自分が知らなかった方法を知り，かぜの予防の知識を広げていくことができた。養護教諭は，グループごとに伝え合いをした時に，専門的視点から予防方法を価値づけたり補足をしたりした。そうすることで，子どもたちは今までに得てきた予防方法や新たに知った予防方法を，実生活で生かしていこうという意欲へつながっていった。



＜第①②時の授業の様子＞

・ふだんの生活で自分ではやっていると思っていても，意外と知らないことや，やっていないことがたくさんあった。
・元気に毎日学校に行くために様々な予防をすることがとても大切だと思います。修学旅行だけじゃなく日常的に気をつけたい。
・体を温めたり，手洗い，うがい，マスクをすることを心がけたい。

＜第①②時のふりかえりシートの抜粋＞

(3)　第③④時「生活のしかたがかかわって起こる病気の予防」

今回の授業においては，生活習慣病の中の「がん」「血管の病気」「むし歯・歯周病」について，「保健師さんに話を聞く」という場を設定するために，そして，本単元の最終時「地域で行われている保健活動」の学習につながる布石を打つために，学校が所在する地域の保健福祉センターを訪問する場を設けることとした。

保健センターでの学習体勢を整えるために，養護教諭が学びを深めるための学習環境整備のコーディネーターとしての役割を担った。まず，保健福祉センターへ電話で問い合わせをし，訪問理由の主旨を説明した。翌日，保健福祉センター所長より訪問快諾の返事をいただいたところで，打ち合わせの日程調整を行った。後日，担任と養護教諭で保健福祉センターを訪れ，保健福祉センター所長と打ち合わせを行った。打ち合わせ資料として，教科書のコピーと訪問計画（目的，参加者，日程，依頼内容）を準備した。今回の授業で取り上げる「がん」「血管の病気」「むし歯・歯周病」３つの病気がすべて生活習慣病であることや，これらの病気の起こる原因や予防方法などの学習内容を伝えていけるよう授業の視点を伝えた。

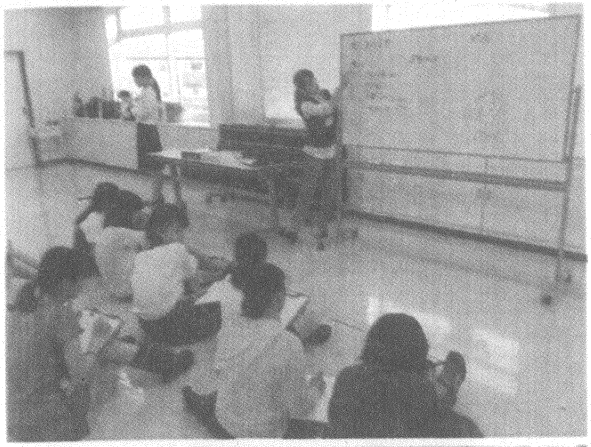
第③時の導入で「かぜの他にどんな病気があるだろう。」と投げかけたところ，がん・ノロウイルス・水疱瘡・インフルエンザ・りんご病・嘔吐下痢症・マイコプラズマ肺炎・結核・O-157・デング熱・脳梗塞などの病気を挙げた。これらの病気を，養護教諭が「病原体がもとになっておこる病気」と「生活のしかたがかかわって起こる病気」に分類したことで，子どもがそれらの病気についてもっと詳しく知りたいと思うきっかけになった。



＜第③④時の授業の様子＞

その後，子どもたちは保健福祉センターを訪問した。「がん」のグループは，がんは日本人の死因の１位であることや，がんの原因，がんを予防する生活等についての話を聞いた。「血管の病気」グループは，悪い生活習慣とはどういうものか，悪い生活習慣が病気につながること，血管のこと(動脈硬化)等についての話を聞いた。「むし歯・歯周病」グループは，歯を失う原因，

むし歯・歯周病のおこり方，おやつの食べ方等についての話を聞いた。







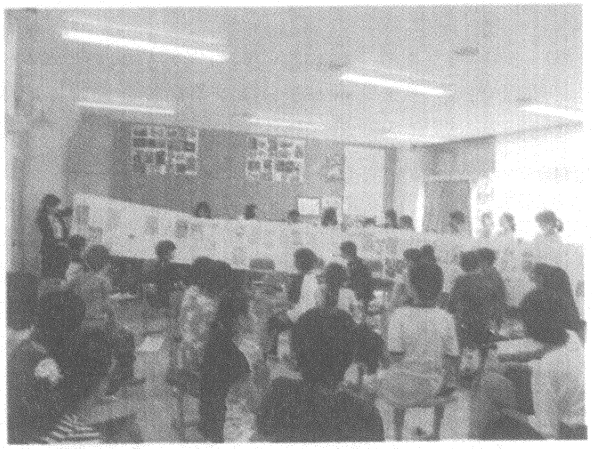
＜保健センターでの様子＞

保健福祉センターでのそれぞれの学びの中で，「がん」と「むし歯・歯周病」のグループの「生活習慣病」としてのおさえが不十分だったため，養護教諭は，第⑤時の活動の中で，しっかり押さえられていた「血管の病気」のグループについた。そこで，自分たちのグループの学びを他の病気のグループへ浸透させていけるように，お互い聞いてきた内容を確認し合う時に，がんやむし歯も悪い生活習慣が原因で起こるから生活習慣病だという子どもの発言を価値づけし，その内容を他の病気のグループへ伝えられることが大事だと，子どもたちへかかわっていった。それによって，「がん」と「むし歯・歯周病」グループも，自分たちが学んできたこれらの病気が「生活習慣病」であるということを押さえていける伝え合いとなっていくことができた。

(4)　第⑦時「地域で行われている保健活動その 1」

第⑤時では，生活習慣病について学んだことを発表し合い，それらを身近な人に伝える活動を行った。第⑥時では，生活習慣病は子どもの頃からの生活習慣が将来の予防につながることから，今の自分の生活をふりかえる場を設け，また，薬学講座で学んだことを活かして，たばこやお酒を誘われたらどうするかを考えていった。

そして第⑦時の導入で，子どもたちに「私たちの身の周りで行われている保健活動ってどんなものがあるだろう」と投げかけた。第①②時でクラスのみんなにかぜの予防方法を，第⑤時で身近な人に生活習慣病について，それぞれ伝える学習活動を行ったが，その際，「かぜ予防し隊」と書かれたタスキを作ってクラスのみんなや身近な人に伝えた男児がいた。この自分たちが行っている活動についての発言が一番初めに出てきた。次に禁煙外来や，テレビや広告など普段自分たちが目にするものを挙げていた。夏休み中に，自分の住んでいる地域で健康に関するリーフレットやチラシを集める課題を子どもたちに行わせていた。そのリーフレット集めの感想を尋ねると，「たくさん種類があった。」「たばこやがんに関する内容が多かった。」「市民や県民のためのものが多かった。」等の感想が聞かれた。「とにかくたくさんあってびっくりした。」と量に着目していた子どもの感想をクラス全体で共有できるように，養護教諭は，事前に子どもたちが集めたすべてのリーフレットのコピーをとり，それらを専門的知識を活かして内容毎に分類しながら模造紙に貼ったものを準備しておいた。量についての発言があったところで，準備しておいた模造紙を提示し，多くのリーフレットがあることを視覚的に実感させた。



＜集めたリーフレットを見る子どもたち＞

子どもたちからは，量の多さにびっくりする反応が数多く聞かれた。そして「ごちゃごちゃして見にくい。」「どうしてこんなにあるのだろう。」というつぶやきを全体に広げていった。すると「教室や講座は市や県がやっているものが多いから，市民や県民が健康に暮らしてほしいと思って企画されていると思う。」「みんなに呼びかけることで病気を予防してもらいたいんだと思う。」等の意見が出された。また，集めたリーフレットを項目別に分けていた児童に，なぜそうしたのか尋ね，分類することのよさを引き出し，グループごとにリーフレットを仲間分けする活動に入っていった。



＜リーフレットの分類活動＞

グループ活動の際，養護教諭は専門的な視点から子どもたちの分類の仕方(呼びかけ，講座，健診，食事等)を価値づけたり，似たような内容のリーフレットをどう分類したらいいか悩んでいるグループに助言したりした。分類後，再度リーフレットがたくさんある理由について聞いてみると，分類したものをもとに「病気にならないように，健康に過ごすための呼びかけをしている」「保健センターとかだけでなく，スーパーとかにも置いてあったから，いろいろな人の目にとまって，健康でいられるため」など，具体的な発言へと変化していた。

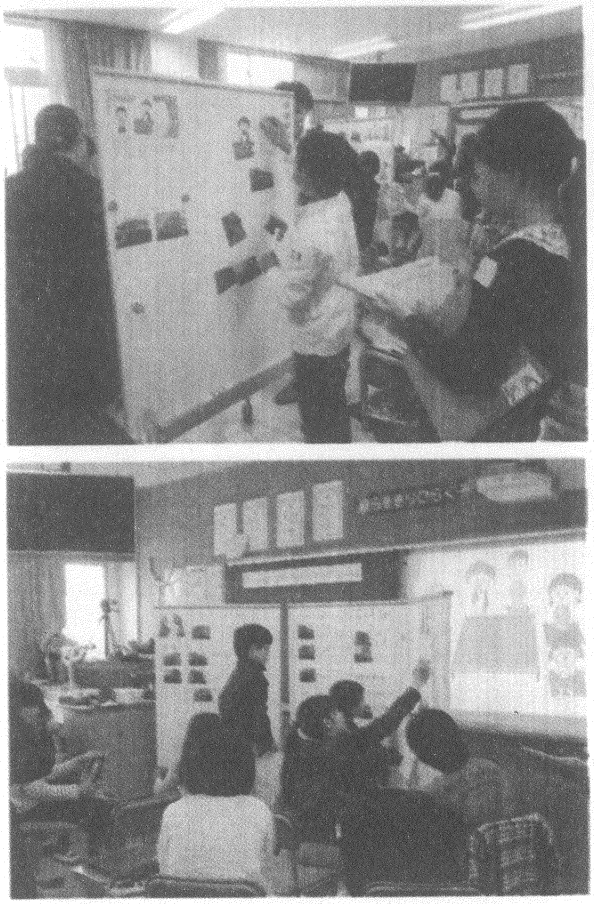
(5)　第⑧時「地域で行われている保健活動その 2」

前時で，リーフレットを分類する活動を通して地域には様々な保健活動が行われていることを知った子どもたちだったが，実際に利用した機会はほとんどないのが現状である。そこで，地域の保健活動の利用のしかたをケーススタディを通して考えていくこととした。ケーススタディを基に，健康を支える地域の保健活動のつながりを具体的にイメージすることを通して，自分や家族の生活と関連付けて理解することを目標に授業を行った。

子どもたちが保健活動を具体的にイメージできるように，よく知っているアニメのキャラクター「ちびまるこちゃん」の家族を例に 3 つのケースを想定した。

ケース①：お祭りで冷やしきゅうりを食べて，おなかが痛くなってしまったおじいちゃんとおばあちゃん
ケース②：職場の健康診断で「生活習慣病予備軍」と言われてしまったお父さん
ケース③：家族のことで悩んでいるお母さん

＜ケーススタディの内容＞



＜ケーススタディの様子＞

ケースの説明を養護教諭がパワーポイントで提示していくと，どの家族が何に不安や悩みをもっているのかを考えようと，子どもたちの気持ちが向かっていった。3 つのケースごとに分かれたグループ活動において，ケース①では，前時で養護教諭から聞いた保健所の役割についての話を思い出し，グループ内で伝えている様子が見られた。ケース②では，提示したスライドのお父さんのイラストから，たばことお酒に注目をしていた。そして，教室内に掲示しておいたリーフレットを見ながら考えている姿も見られた。ケース③では，最初に自分たちが集めたリーフレットのファイルを個々に見ている様子が見られた。そこからケースの内容と関係のありそうなものを出しながら考えていく姿がみられた。養護教諭はケース①のところで専門的知識を活かし，保健所の活用での助言ができるようか

かわっていった。

ケーススタディによって地域の保健活動を具体的にイメージすることができた子どもたちに,「自分たちの身近な人に保健活動をすすめるとしたら，どんな人にどんなものをすすめるかな」と投げかけた。「お父さんやおじいちゃんにたばこやお酒をやめてほしいから，保健所や保健センターが利用できる。」という意見や,「お母さんがストレスを抱えているから,保健センターやスクールカウンセラーが利用できる。」といった意見が出された。たばこやお酒について「言ったってやめないんだよね。」という本音を語りつつも，身近な保健活動をできる限り活用していこうと考えている様子が見られた。

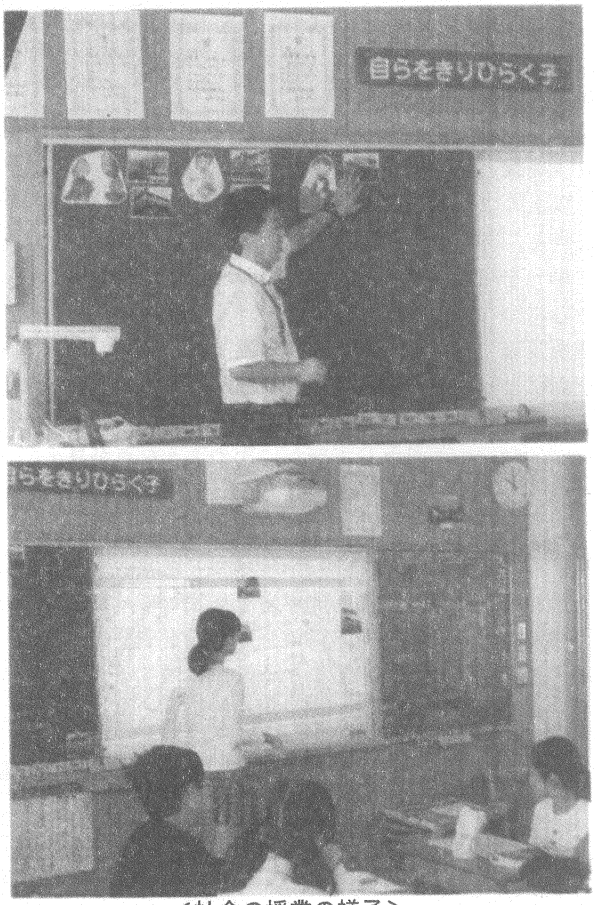
養護教諭は，地域の保健活動のつながりがわかるように板書しながら，子どもたちの発言をまとめていった。そうすることで地域の保健活動を自分や身近の人の生活とのつながりを意識できたと思われる。そして，最終時のまとめとして語った「周りの人はもちろんのこと，みんな自身も健康でいてほしい。今まで勉強してきたことを周りの人も自分も健康になるために，これから活かしていってほしい。」という内容が，小学校の保健学習のまとめとしても日常の保健活動へもつながっていく内容だったため，子どもたちのふりかえりの中に「小学生の今からできることをやっていきたい。」と，より自分事として捉え，今の自分の健康，自分以外の身近にいる人の健康，将来に向けての健康を考えていくことのきっかけとなった。

(6) 6 年社会科「もっと清水を住みよい町に！」(暮らしの中の政治)

保健の授業で地域の保健活動をどのように活用したらよいのかを考えるケーススタディで取り上げた「ちびまるこちゃん」は，静岡市清水区(旧清水市)が舞台となっている。自分たちが住んでいる地域に実在したちびまるこちゃん家族を想定して，実際の清水区の現状(保健医療施設の立地や，保健医療問題)とつなげていくことで，住みよい町づくりをしていくための行政のしくみを学んでいく社会科の単元へとつなげていった。

第①時の導入で,「さくら家の人たちはどんな施設を利用すればよかったかな。」と，保健の授業で実施したケーススタディをふりかえる投げかけをした。そうすると，保健センター，保健所，病院といった施設の名称が子どもたちから出てきた。

それらの施設が，実際の清水区のどこにあるのかを確認していった。清水区中心部の地図を提示し，施設を明示していった。距離感がつかめるように，縮尺に目を向けたり，清水区民の子どもに距離感を語ってもらったりすることで，施設が点在していて利用しにくいのではないかということに気づき始めた。更に，現在清水区が抱えている「人口減少」の問題に目を向けさせるための新聞資料や，総合病院移転問題の新聞資料を提示していった。



＜社会の授業の様子＞

保健の授業で学んだ内容を実際の状況に照らし合わせ，そこから見えてきた自分たちが住んでいる地域の問題へとつなげていき,「清水をよりよい町にしていくにはどうしたらいいだろう。」という社会科の学びにつながっていった。

・病院や保健所が遠くてとても大変だと思った。
・病院や保健センターが家から遠い人は不便だから利用しにくい。
・駅の近くに病院を作れば気軽に行ける。
・公共の施設を増やしたらいいと思う。
・不便だからもっと病院とか作ってほしい。

＜社会科第①時のふりかえりの抜粋＞

第②時では，清水をよりよい町にしていくにはどうしたらいいかを，引き続き考えていった。子どもたちからは幅広い様々な意見が出されたが，それを見て 1 人の子が「みんなが出してくれた中に医療や保健の対策がない。」という発言をした。問題の原点に立ち返るこの発言をきっかけに,「医療・保健・防災(清水区の人口減少は東日本大震災を機に顕著となっている)」に力を入れて，清水をより良くしていく具体を考えてい

くことが確認されていった。そして,「どこにどんな施設があるといいか」という,更に具体的な内容を考えていき,自分たちが考えた町づくりを実現するにはどうしたらいいかという流れで社会科の学び(選挙制度や議会制度など)に進んでいった。

4　成果と課題

以上のように,保健と社会科の横断的学習を実践してきた。昨年度の実践において,「保健と理科をつなげて単元を組むことが,それぞれの理解をさらに深めることにつながる」ことや,「担任と養護教諭がTTで授業を実施することで,お互いの専門性を発揮でき,子どもにとっても授業内容がより理解しやすいものとなる」ことが示唆されたが[10],本年度の実践を通して,横断的学習の成果として新たに次のような点が見えてきた。

1つ目は,「社会で活用できる知識の習得をより図りやすくなる」ということである。今回の保健の授業では,その後の社会科への横断的学習を想定して,自分たちの住んでいる地域にある保健医療施設を取り上げた。その他にも,実際に地域にある健康に関するリーフレットや,保健師から話を聞く場を設定する等,実物に触れることで実感を伴った学びを通して,より自分事として捉えられるような授業を展開した。また,社会科においては,保健の授業で具体的に学んだ,静岡市という自分たちの地域の保健活動の実態と課題について,子どもが社会的事象を切実に捉え,自分事として政治の仕組みを学んでいけると考えた。子どもたちに,社会科の授業をやっていて保健の授業のどの部分を思い出したか,ふりかえりシートを記入させ,それらを保健の授業の内容につながるような言葉を抽出の観点としてKJ法を用い分析したところ,41のコードが抽出された。さらにそれらは4のカテゴリーに分類された。(以下(　)内にコード数を示す。)“施設について(21)”“ちびまる子ちゃん一家のケーススタディ(8)”“病気の予防について(7)”“保健福祉センターで聞いたこと(5)”であった。この横断的学習の流れは,次期学習指導要領で育成したい資質・能力の1つである,生きて働く「知識・技能」の習得のために重要とされている,既存の知識と関連付けたり組み合わせたりしていくことにより,学習内容の深い理解と,知識・技能の定着を図るとともに,社会における様々な場面で活用できる知識として身に付けていくことに通ずるものがあると考える[15]。

表2　社会科の授業で保健の授業のどこを思い出したか

カテゴリー	コード	N=41(%)
施設について	さまざまな医療・福祉施設があること。(8) どこでどのような活動をしているのか。どこに行けば相談できるのか。(5) 保健センターと保健所の役割のちがい。(3) 施設の大切さ。(2) 施設のことや老人のための活動センター。 施設や場所の問題。 保健所の他に交流館があること。	21(51.2)
ちびまる子ちゃん一家のケーススタディ	まる子の家族が抱えている問題を解決する方法を考えるところ。(4)。 まるちゃん一家が違い病院を使っていたところ。(2) まるちゃん一家の健康問題。 まるちゃんの祖父母が食中毒になったら保健所や大きな病院、市役所などに行くことや、その後お祭りのことなどを家族で話し合った方がいいということ。	8(19.5)
病気の予防について	病院が近くにないことで起こりうる問題。(4) 病気にならないためにどうしたらいいかを考える部分。(2) 保健センター、食中毒、がん、生活習慣病。たばこやお酒を飲むと病気になりやすい。	7(17.1)
保健福祉センターで聞いたこと	城東保健センターで聞いた話。(2) 班で意見を出し合って一つにし、さらに話し合ったり意見を言い合ったりすること。(2) 自分たちの身近な暮らしや町のことをたくさん話し合ったこと。	5(12.2)

2つ目は,「養護教諭の専門性を幅広く認識でき,且つそれらが子どもの学びを支えるものとなる」ということである。養護教諭が授業に関わる際に専門性を活かせる手段として,授業の最後に専門的な話をしたり,資料を提示したり等はよく行われている。今回の授業においても,保健センターや保健所の役割について説明したり,養護教諭自身もリーフレット集めをして,子どもがいつでも見られるように準備をしたりした。それだけでなく,養護教諭が担任とは異なる立場から伝える「言葉」も養護教諭の専門性として,子どもの学びを支えることができることを感じた。体調不良で行事に参加できなかったり,行事そのものが中止になってしまったりしたエピソードや,子どもたちが考えた病気の予防方法の価値付け,最終時の子どもたちの健康への願い等を,養護教諭が今回の授業実践の中で子どもたちに伝えた。養護教諭が話すことで子どもたちの心に落ちていく,これも養護教諭のもつ専門性であると認識できた。また,今回の授業実践はグループ活動を多く取り入れたが,グループ間で話し合いの内容や深まりに差が出てくることが,担任と共に各グループの様子を直接見聞きしたり,ふりかえりシートを分析したりすることでわかった。子どもたちの実態に応じて養護教諭が学習内容を価値づけたり,補足をしたりすることで,子どもたちの理解を深めていくことが

できる点も，養護教諭の専門性であると感じた。

横断的学習が次期学習指導要領におけるポイントであることを踏まえ，課題としては次のことが挙げられる。

昨年度の保健と理科，本年度の保健と社会科と，どの教科との横断的学習が展開できるかを考えたときの視点は「教材の共通性」である。各教科には，その教科でねらう目標がある。教材の共通性ばかりに目が向いてしまうと，教科としての目標が曖昧になってしまう可能性がある。最終時を終えた後，子どもたちに単元全体を通してのふりかえりシートを記入させ，KJ 法を用い分析したところ，34 のコードが抽出された。さらにそれらは 4 のカテゴリーに分類された。(以下( ) 内にコード数を示す。) “生活習慣病についての理解(13)” “身近な人への呼びかけ(10)” “自分のこれからの生活についてのふりかえり(8)” “かぜの予防方法の確認(3)” であった。保健の授業を通して，子どもたちには健康についての認識を自分事として捉え，健康な生活を送るためのより良い方法を自分なりに考えることをねらいとしていた。自らの健康や自らの病気の予防について考えていくべきところであったが，「社会科とのつながり」を意識したことで，周囲の健康に目が向いてしまったような気がする。それは，保健福祉センターの役割である地域保健が，子どもだけを対象としているわけではないため，やむを得ないところである。

表 3　保健の全単元終了後のふりかえり

カテゴリー	コード	N＝34(%)
生活習慣病についての理解	運動する、好き嫌いせず食べるなど身近なことをすると健康でいられる。(3) 健康な生活をすれば生活習慣病になりにくくなることを知った。(2) 生活を乱さないことが一番大切なことだと思った。 生活をよくする方法を知った。 少しでも悪い生活をするととっても危険な生活習慣病になってしまうとわかった。 がんになる人が多いのにびっくりした。 自分が良い生活をしていても、周りの人がタバコを吸ってしまったら自分もがんになってしまう。 たばこを吸うと体に悪いことは知っていたけど、がんの３分の１が死ぬとかは知らなかった。 がんは最初なってしまったら治らないと思っていたけど常に検診を受けて早期発見をすれば治るとのことだったので常に検診を受けた方がいい。 生活習慣病について教えてもらったら、禁煙外来の大切さが分かった。	13(38.2)
身近な人への呼びかけ	家族でたくさん気をつければ健康な生活が送れるから、みんなに広めたい。(3) 健康になる方法を色々な人に知ってもらいたい。(2) 家族や友だちにも教えて生活習慣病にならないように気をつけていきたい。(2) お母さんの飲みすぎには注意したい。 みんなが元気になってもらいたい。 お父さんやおじいちゃんに健康でいてもらうために、お酒やたばこを吸うとがんになったりすることを伝えてやめてもらいたい。	10(29.4)
自分のこれからの生活についての振り返り	今から規則正しい生活をして大人の自分が病気にならないようにしたい。(2) この授業で習ったことを活かして予防をしたりしながら健康な生活をしていきたいと思った。 今まで運動不足で健康じゃなかったけど、これから健康な生活を心がけて病気にならないようにしたい。 自分が将来生活習慣病になったら人生台無しになるから、小さい頃から気をつけていきたい。 自分の生活の振り返りとか、これからどう気をつけるのかを考えることができたので、病気を予防したい。 将来、生活習慣病にならないためには、小学生から心がけることが大切って知ったから、今からならないよう食事はしっかりとって早寝早起きをして運動したい。 今から気をつけて健康でいたい。	8(23.6)
かぜの予防方法の確認	インフルエンザやかぜにならないためにも、手洗いやうがいや早寝早起きや好き嫌いせずしっかり食べたい。(2) 習ったことを生かせてかぜの予防につながってよかった。	3(8.8)

次期学習指導要領において，すべての教科等や諸課題に関する資質・能力に共通する要素として，「何を理解しているか，何ができるか(生きて働く「知識・技能」の習得)」，「理解していること・できることをどう使うか(未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成)」，「どのように社会・世界と関わり，よりよい人生を送るか(学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養)」が挙げられている[15]。今後は「ねらいの共通性」という視点で今後の横断的学習の展開を考えていく必要がある。

＜謝辞＞

本研究を進めるあたり，静岡大学教育学部附属静岡小学校の教員の皆様に多大なる御協力をいただきましたことを心より感謝申し上げます。

＜引用文献＞

1) 中央教育審議会：子どもの心身の健康を守り，安全･安心を確保するために学校全体としての取組を進めるための方策について(諮問)，2007
2) 文部科学省：「生きる力」を育む小学校保健教育の手引き，2013
3) 中央教育審議会：子どもの心身の健康を守り，安全・安心を確保するために学校全体としての取組を進めるための方策について(答申)，2008
4) 日本学術会議健康・生活科学委員会子どもの健康

分科会：日本の子どものヘルスプロモーション，2010
5)厚生労働省：健康日本21(第2次)の推進に関する参考資料，2012
6)厚生労働省：厚生労働白書〈平成26年版〉健康長寿社会の実現に向けて―健康・予防元年，2014
7)厚生労働省：21世紀における国民健康づくり運動(健康日本21)について報告書，2000
8)再掲3)，p1
9)日本学術会議健康・生活科学委員会子どもの健康分科会：現代社会における子どもの健康生活の擁護と推進に関する課題と方策－地域・学校におけるヘルスプロモーションの推進－，2008
10)渡邊睦美，鎌塚優子：養護教諭の専門性を活かした保健と他教科の横断的学習の試み，静岡大学実践総合センター紀要 vol.25 pp.243～251，2016
11)文部科学省：小学校学習指導要領解説体育編：2008
12)兵庫県教育委員会義務教育課:学習指導要領改訂のポイント(小学校体育)，2008
13)文部科学省：小学校学習指導要領解説社会科編，2008
14)文部科学省:教育課程企画特別部会 論点整理,2015
15)文部科学省:次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ，2016